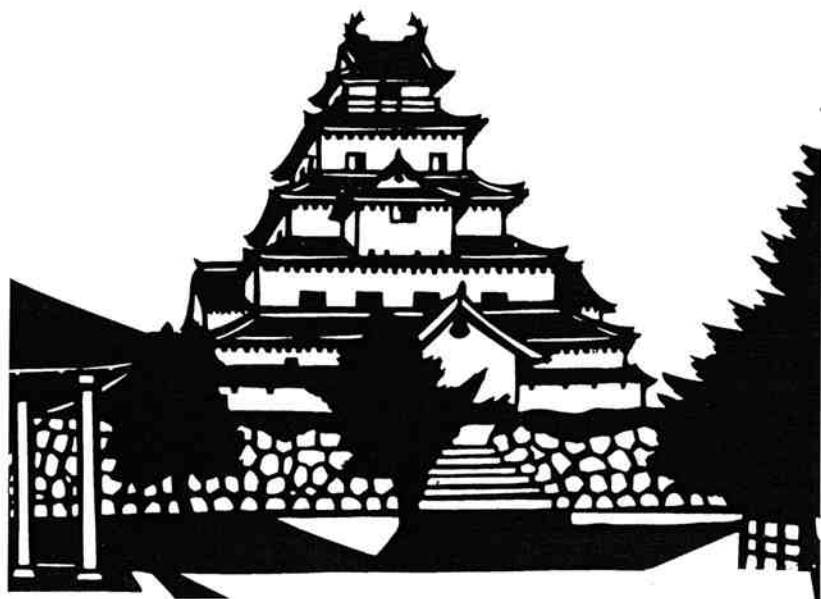


(2001年作)

戊辰戦争と会津藩

(付・俳句「会津落城」)

羽  
鳥  
爽  
洲



# 戊辰戦争と会津藩

羽 鳥 爽 洲

福島県の会津若松に、今から二十五年ほど前、観光名所「会津武家屋敷」がつくられた。

これは幕末の会津藩主松平肥後守容保の家老だった西郷頼母近意邸の鳥瞰図が発見されたのを機に、家老屋敷が復元され、旧中畑陣屋もここへ移されて、「会津武家屋敷」と呼ばれることになり、鶴ヶ城、飯盛山と共に戊辰戦争をしのぶ名所となった。

（戊辰戦争とは一八六八年〈慶応四年・明治元年〉の鳥羽・伏見の戦いから、北越長岡藩・会津藩の戦いを経て、翌年の箱館五稜郭の戦いに至る内乱で、一八六八年が戊辰の年だったので一般にこう呼ばれている）

私は会津若松へは何回か行っているのだが、去年初めてこの会津武家屋敷を訪れた。西郷頼母邸をぜひ見たかったからである。

屋敷の内部はどこも興味があつたのだが、この敷地内に会津歴史資料館というのがあり、そこに西郷一族の自刃の場というのがある。人形ではあるが頼母の妻が二歳の幼女を抱えて自刃している姿に私はショックを受けた。娘四人の自刃している人形もあつた。（西郷一族の自刃は全部で二十一名に及ぶ）

こみあげてくる涙を抑えかねて私は外へ出た。見物客の中には嗚咽している女性もいた。なんでこんな残酷な場面を人形を使って再現しなければならないのか、と私は最初腹が立ったのだが、しかし再現しなければ腹がおさまらない会津の人々の気持ちもわかるようで、桜の花がはらはら散る下に私は暗然たる気持ちで立ちつくしていた。

右軍 (書記)

(書記)

小姓 (書記見習い)

(書記見習い)

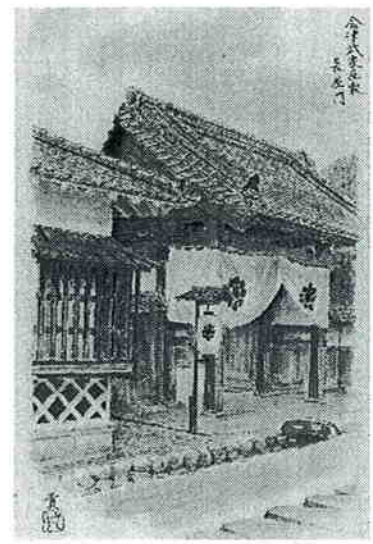
ここ数年、私は会津若松へ足を運ぶたびに、会津の人々に詫びたい気持ちを抑えかねていた。会津の歴史を調べれば調べるほど、私の会津への思いは深まる一方だった。

私の父方の祖先は長州藩士である。曾祖父も祖父も、長州十三代藩主毛利慶親(後に敬親)や十四代藩主毛利元徳(定広、広封、後に元徳)の側近だった。吉田松陰や高杉晋作らと面識もあったという。昔の私が長州藩にそれなりの誇りを抱くのは自然だった。

しかし、やがて、明治維新以後の薩長土肥(薩摩・長州・土佐・肥前)連合の藩閥政府が天皇制を絶対化して軍事大国・植民地帝国への道をたどった歴史に批判的となった。さらに戊辰戦争の内容を知るにつけ、敗者の歴史に同情を抱き、徐々に会津びいきとなるに至った。

幕末の櫻田門外の変(一八六〇年)、坂下門外の変(一八六二年)のあとの文久年間、会津藩主松平容保が「京都守護職」として京都の治安を担当、後に近藤勇らの新選組が会津藩の指揮下にはいり、長州藩のさまざまな策動を妨害したので、会津藩は特に長州藩の憎悪の対象となった。

松平容保は京都守護職なる役は初めから何度も断っている。しかし、徳川慶喜と共に幕閣に登場した松平春嶽は、執拗に容保を説得した。この春嶽は、越前福井藩主当時の松平慶永で、井伊直弼が將軍家茂の命令で大老になる前は、この慶永が大老になると思われていた人物である。井伊大老の安政の大獄で慶喜と共に塾居謹慎を命ぜられており、一八六二年(文久二年)に復活、徳川慶喜が將軍後見職、春嶽は政事総裁職となった。この春嶽が松平容保を京都守護職にするため何度も手紙を送り、みずから足を運んで説得したのである。



作家：早乙女貢氏の絵  
「会津家老屋敷表門」



会津藩9代藩主 松平容保

「公武合体の成るかならぬかは、容保どのの決断一つにかかっている」「二代将軍秀忠公や藩祖保科正之公ほしなが生きておいでになれば、あなたはきっと引き受けるにちがいない」

この言葉は容保にとっては殺し文句だった。初代会津藩主保科正之は秀忠の三男で、三代将軍家光の異母弟であり、その「家訓」の第一条は、徳川宗家へ忠勤をつくせというものだった。容保は九代目の藩主で、尾張徳川家の分家から会津藩主の養子となってきただけに、藩祖の家訓まで引きあいに出されては、ついに引き受けざるをえなかった。このとき容保二十八歳。

徳川慶喜・松平春嶽らの幕閣は、会津藩の強大な兵力が欲しかったのである。さらに会津藩校日新館の教育は、他の藩校にくらべて群をぬいて質が高く、さらに藩祖以来儒教（それも朱子学）を重んじる気風が藩全体に満ち、東北人らしい質実剛健の藩だったからである。

会津藩家老西郷頼母は、容保が京都守護職を引きうけることに職を賭して反対した。京都の政情不安もあり、彼には幕府への不信感もあつて、主君の翻意を乞うたが、容保の決意は固かった。徳川宗家に律義な容保は、激動する京都の表舞台に立たざるをえなかった。会津藩は、危険を承知で、あえて、火中の栗を拾ったのである。

（西郷はこのあと家老を辞して家に引きこもった。彼が家老として復帰するのは六年後の会津攻防のときである）

これが会津藩の悲劇の始まりだった。やがて歴史は急転回する。大政奉還、幕府崩壊、王政復古、江戸総攻撃。

この激動の中で、徳川慶喜も松平春嶽もさっさと身を引いて、松平容保を火中から救ってやらなかった。救えなかったのかもしれないが、容保はひとり孤立し、薩長の標的となるほかはなかった。

ここで少々脱線するが、ぜひ大政奉還についてのべておきたい。この案は一八六七年（慶応三年）坂本龍馬が船の中で考

えたいわゆる「船中八策」で、のちに後藤象二郎を通じて土佐藩主山内容堂やまのぶに働きかけ、容堂が幕府に建白したものである。

「要点は、朝廷を中央政府とし、議会を作り憲法を制定し、政府直属の軍隊を設置するもので、幕府も藩もなく中央集権的で、立憲的国家体制である。これが現在の国内の分裂と混沌と終るところを知らぬ紛糾を止めるものと考えて、書き列ねた。……龍馬は、幕府との武力対決なしに、新しい日本を出現させようとしている。一貫して幕府に従って来た藩の立場として、薩長両藩の武断策と肩を並べて、立派に主体性のある主張として押出せるものであった」(大佛次郎『天皇の世紀』第七巻、「諸家往来」二)

徳川慶喜が大政奉還を受け入れたとき、龍馬は「將軍家今日の御心中さこそと察し奉る。よくも断じ給えるものかな、よくも断じ給えるものかな。余は誓つて此公の為に一命を捨てん」と言つたそうである。(大佛次郎、前掲書、「諸家往来」八)

徳川慶喜の大政奉還の決断に一番おどろいたのは、武力倒幕を計画していた西郷隆盛や大久保利通だった。慶喜の政治的判断は二人の判断よりはるかに正確だった。薩長にしてみれば、慶喜の首をとらなければ革命の意味がない。そのためには何としても慶喜に朝敵の汚名を着てもらわねばならなかった。そこで薩長両軍は「錦の御旗」をかかげ、戦いをおこさせるべく徳川方を挑発したのである。

大政奉還のすぐあと、坂本龍馬は暗殺された。犯人像は新選組説、幕府の京都見廻組みまわり説とその黒幕に後藤象二郎の名が出てくる。さらに薩摩藩説とその黒幕に西郷隆盛と大久保利通の名が出てくる。

この大政奉還の頃の龍馬は、薩摩藩にとってじゃまな存在となっていた。武力討幕のコースは龍馬と相容れなくなっていたし、徳川慶喜の存在を認める龍馬を除こうとしたとしても不思議ではない。薩摩藩犯人説は今日でも根強いのである。作家半藤一利氏は西郷黒幕説、劇画家のさいとう・たかを氏は大久保黒幕説をとっている。(『NHK歴史発見』第一巻・第六巻、



江戸幕府 15代将軍 徳川慶喜

もし坂本龍馬が生きていたら、明治維新そのものもかなり変わっていただろうし、その後の日本のコース、たとえば天皇中心の絶対主義国家などを龍馬は考えもしなかっただろうと思うのは、私だけではないはずである。

以上のような背景からわかるように、薩長土肥を中心とする連合軍は、西郷と勝海舟の会談によって江戸城が無血開城となるに及んで、会津藩をいけにえにしなければ収まらなくなった。会津藩は徳川慶喜の身代わりとなったようなものである。「勝てば官軍、負ければ賊軍」ということは明治維新にもあてはまる。

会津藩は朝敵の汚名を着せられ、連合軍に攻められ、鶴ヶ城に籠城すること一カ月、ついに降伏した。しかも会津藩はさらに藩を挙げて流罪となり、下北半島へ追いやられた。

後に陸軍大將になった会津人柴五郎は、晩年遺書をのこしたが、そこにはこう書かれている。

「いくたびか筆とれども、胸塞がり涙さきだちて綴るにたえず、むなしく年を過して齡すでに八十路をこえたり。(中略)

過ぎてはや久しきことなるかな、七十有余年の昔なり。郷土会津にありて余が十歳のおり、幕府すでに大政奉還を奏上し、藩公また京都守護職を辞して、会津城下に謹慎せらる。新しき時代の静かに開かるるよと教えられしに、いかなることのありしか、子供心にわからぬまま、朝敵よ賊軍よと汚名を着せられ、会津藩民言語に絶する狼藉を被りたること、脳裡に刻まれて消えず。(中略)

落城後、浮虜となり、下北半島の火山灰地に移封されてのちは、着のみ着のまま、日々の糧にも窮し、伏するに極なく、耕すに鋤なく、まこと乞食にも劣る有様にて、草の根を噛み、氷点下二十度の寒風に蓆を張りて生きながらえし辛酸の年月、いつしか歴史の流れに消え失せて、いまは知る人もまれとなれり」(『ある明治人の記録』、中公新書)

司馬遼太郎はこのことに関してこう書いている。

「権力の座についた一集団が、敗者にまわった他の一集団をこのようにしていじめ、しかも勝利者の側から心の痛みを見せ

なかつたというのは、時代の精神の腐つた部分であつたといつていい」(『街道をゆく——奥州白河・会津のみち』)

ここで会津のためにふれておかねばならないことは、孝明天皇が二度にわたつて松平容保に書き送つた「宸翰」(天皇直筆の書簡)のことである。天皇は京都守護職の容保を非常に信頼していたようで、側近の公卿にも心をひらけないので、この手紙のことは内密にしてくれるようたのんでいる。「極密々書状遣候」という書き出しである。容保がこの宸翰をもつと早く発表していたら「朝敵会津」の汚名は濡れ衣だつたことがわかつただろうが、容保は天皇の言葉を守つて死ぬまで誰にも洩らさなかつた。竹筒に入れて肌身離さず持つていた。

このことが発表されたのは一九〇二年(明治三十五年)になつて出版された旧会津藩家老山川浩の『京都守護職始末』においてであつた。この宸翰は現在会津松平家十三代松平保定氏(もいよだ)氏によって日本興業銀行の金庫に保管されている。(私はNHKテレビで見ている)

司馬遼太郎はこう書いている。

「容保はこの守秘については、生涯をかけてまもりぬいた。天皇崩御ののちは、いわばみずから解禁してもよかつたらうが、それでも黙っていた。また時勢が大旋回して朝敵の名を蒙つたときもこの宸翰をもちだして立場を明らかにしようとはしなかつた。まことに「道理」の人というほかない。

おそるべきことは、藩士にさえ明かさなかつたことである。明治二十六年、死の病床にあつても身辺のものにさえ明かしてない。(中略)

死後、竹筒のなかみを一族・旧臣が検(あ)ためてみると、なんと孝明天皇の宸翰二通だつた。この二通が、明治後、沈黙の人になつた容保のささえだつたのである。

それでもなお、会津人はつましかつた。この二通で、薩長という勝者によつて書かれた維新史に大きな修正が入るはずなのに、公表せず、ようやく明治三十年代になつて『京都守護職始末』に掲載するのである」(『奥州白河・会津のみち』)

最後に、家老西郷頼母のその後のことをつけ加える。この人は以前、会津の大石内蔵助といわれたくらい的人物だったようである。頼母が容保に呼ばれて家老に復帰、ただちに白河口方面の総督として戦ったが利あらず、敗戦の責任をとって総督を辞任する。その後、鶴ヶ城で籠城、容保に降伏を進言したため藩士に命を狙われ、一族自刃の二日後、容保の特別の命令で越後へ脱出、のちに新選組の土方歳三ひじかたらと共に戊辰戦争の最後まで戦い、箱館五稜郭で囚われの身となる。悲劇の人といわねばならない。ただし、生命は助かり、一八八一年（明治十四年）に日光東照宮の欄らん宜ぎとなったが、宮司みやうじは旧藩主容保で、久しぶりに再会した二人は何を語りあったことであろう。なお、西郷の養子となった志田四郎（西郷四郎）は柔道家で、富田常雄の小説『姿三四郎』のモデルだったことは知る人ぞ知る。

私は山形県に住んで十年になるが、となりの福島県は観光地どころか、ますます贖罪しよくざいの地のように思われる。そして、今から一三〇年ほど前の戊辰戦争が、今の私にはまるで去年のできごとのように思い出される。

日本の近代化のゆがみはずでにこの当時から始まり、悲惨な太平洋戦争を経て今日にまで及んでいることを考えると、この戊辰戦争を忘れたままで二十世紀の日本を反省しても、私には不十分のような気がする。明治維新の諸問題は、今日につながる問題でもあると思うからである。

以上で終わりなのだが、今回は特に蛇足を一言。去年四月、会津を訪れたとき、鶴ヶ城の桜を見て、私は次のような句をつくった。

会津 燦々 濠ほり一面の花はな笥いかり

この句を採ってくれた選者佐藤鬼房おにぶら氏の評にはこうあった。

「燦は、あざやか・あきらか・きらびやかで、目がくらむほど光の色の美しい形容。燦燦は燦然と同じく、鮮やかで美しいさ





鶴ヶ城の桜  
(NHK出版『司馬遼太郎の風景』第6巻)

ま、きらきら輝くさまを言う。「会津燦々」となれば、それに加えて、郷土意識のこもる誇らしい高揚の気風が感じられる。作者はこの土地のものではないが、この「燦然と輝くわが会津の美しさ」に共鳴したのだ。折から万朶ばんたの桜が散りはじめ、かの莊厳の会津魂に出あったような、鶴ヶ城の歴史的空間に思いを馳せるのも当然であろう。落花は次々に筏を組み濠を埋めんばかり》（『朝日新聞』山形版「やまがた俳壇」、二〇〇〇年六月七日付）

せめて戊辰戦争当時の会津の人たちに捧げたいと思つてつくつたこの句に、こういうすばらしい評をもらえて、大変嬉しかったことを特に書いておきたいと思う。

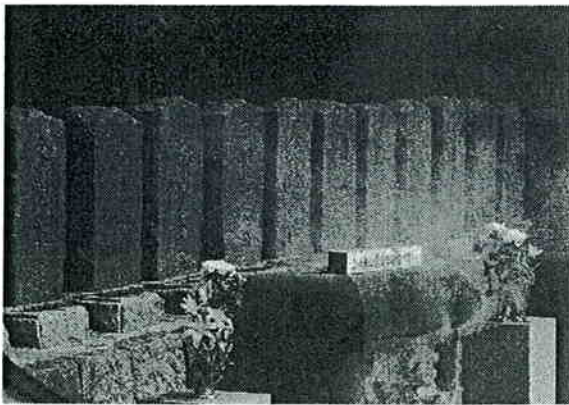
(二〇〇一年二月)

〔俳句〕

会津落城

〇	〇	〇	〇	〇	〇
飯	菊	露	白	野 <sup>の</sup>	戌
盛	棒	燦	虎	分 <sup>わか</sup>	辰
山	ぐ	々	隊	立	遙
秋	生	白	自 <sup>じ</sup>	つ	け
風	存	虎	刃 <sup>や</sup>	母	き
挽 <sup>は</sup>	白	隊	の	成	母 <sup>は</sup>
歌 <sup>か</sup>	虎	士	丘	峠	成 <sup>な</sup>
か	隊	の	や	の	峠
ぎ	士	墓	星	土	の
り	の	十	流	葬	秋
な	墓	九	る	塚	の
し					風

／印は読みリズムのための区切り



飯盛山の白虎隊士の墓

羽  
鳥  
爽  
洲

○ 本陣や月光照らす刀疵

○ 冷まじや家老家族の自刃の間

○ 子を抱へ刀自刃せる居間の冷え

○ 娘<sup>じよ</sup>子隊<sup>し</sup>殉節の地や白芙蓉

○ 落城の悲話訥々と月見酒

○ 墓<sup>地</sup>凍てて会津の無念語らざる

空<sup>くう</sup>華<sup>け</sup>かも会津武家邸牡丹雪

官賊<sup>はんに</sup>の維新異議ある罫<sup>い</sup>炉<sup>ろ</sup>裏<sup>り</sup>かな

戊辰の役知らぬ茶髪のスキー客

○ 雪しまく／<sup>きよ</sup>挙藩流罪の陸奥斗南

○ 下北や／会津移民の墓地凍る

柴五郎<sup>じや</sup>の遺書克明に／雪地獄

地吹雪や／火山灰地の会津墓碑

○ 寒北斗／戊辰は遠く／なりにけり

注① 官賊とは官軍を名のる賊軍。会津からみた薩長  
注② 柴五郎はのちの陸軍大将。会津人



会津藩士が上陸した下北半島大湊港



藤沢忠氏の切り絵